

崇禎本『金瓶梅』第一回到に於ける考察

——中国文学に於けるホモソーシャルへの手懸かりとして——

大 村 由 紀 子

要 約

本稿は『金瓶梅』の二系統のテキストのうち、「崇禎本」第一回に見られる西門慶と花子虚に関する描写を中心に検討を行った。その結果「詞話本」第一回は『水滸伝』の武松物語を敷衍したものであるのに対し、「崇禎本」第一回は西門慶の登場から、西門慶ら朋輩十人が義兄弟の契りを結ぶという話になっており、「詞話本」とは全く異なる展開であることが解った。その上で西門慶の朋輩の一人花子虚に関する描写がより詳細であることによって、後に朋輩西門慶に妻李瓶児が奪われる花子虚の悲劇性が一層増すことを指摘した。

中国文学では基本的に男性同士の絆や友情について描く作品が多い中で、『金瓶梅』は作者が男性の紐帯について距離を置いている作品であると筆者は考えるが、「崇禎本」は「詞話本」を改作した際に、更にその傾向が増したと思われる。

キーワード：『金瓶梅』、「崇禎本」、男同士の絆、ホモソーシャル、中国文学の特徴

はじめに

『金瓶梅』は明代万暦年間に刊行された「四大奇書」の一つである。しかしながら当時既に「穢書」¹⁾という評価があったように、内容に性描写があることなどから研究対象として忌避されがちであり、他の『三国志演義』『西遊記』『水滸伝』と較べると研究は遅れを取っているように思われる。

ここ近年になって、ようやく基礎的な研究が整うようになり、『金瓶梅』の素材を指摘した研究や、更に明代の日用類書との関連を論じるような論攷が上梓されるなど、独特な研究も見られるようになった²⁾。

しかしながら、管見の限りでは、『金瓶梅』の内容に踏み込んだものは多くはないように思われる³⁾。それは内容に性描写が多いだけでなく、『金瓶梅』のテキストが様々な修辞技巧に富んでおり、極めて難解なテキストであるからであろう⁴⁾。

なお『金瓶梅』は三系統の版本が存在するが、本稿ではその中でも崇禎本『金瓶梅』第一回について、幾つか考察を加えるものとする。

一 『金瓶梅』の版本について

前述のように、『金瓶梅』の版本は三系統の版本がある。一つは万暦丁巳（万暦四十五年、一六一七年）年の弄珠客序を持つ『金瓶梅詞話本』、いわゆる「詞話本」である。もう一つには崇禎年間に刊行されたとされている『新刻繡像批評金瓶梅本』、別名「崇禎本」である。最後に、康熙年間に刊行された張竹坡批評による『第一奇書本』、別名「康熙本」である。

「崇禎本」と「詞話本」との関わりについては荒木猛「崇禎本『金瓶梅』考」（『金瓶梅研究』、思文閣出版、二〇〇九年）に既に詳しい。荒木氏は「崇禎本」と「詞話本」とを比較検討した上で次のように述べられている。なお傍線部は筆者が附したものである。

- 一、「詞話本」にある欣欣子の序と開場詞は、「崇禎本」にはない、
 - 二、「詞話本」においては題目の字数や対偶に不揃いなものはあるが、「崇禎本」ではこれを改め、字数を揃え対偶の整うようにしている、
 - 三、第一回の話の出だしが全く異なる、
 - 四、第五十三回より第五十四回までの全文がまったく異なる、
 - 五、「詞話本」第八十四回に見える、呉月娘が泰山に参籠した帰り山賊に襲われそうになった時、宋江により救われるといういまだ『水滸伝』の影響から抜けきれない部分が崇禎本から抜けきれない部分が、「崇禎本」では削られている、
 - 六、「詞話本」には山東方言が多いが、「崇禎本」では、これを改めたり削ったりして読みやすくしている。
- といった相違がある。また「崇禎本」と「康熙本」との間には、「康熙本」において題名を第一奇書と改め、冒頭に謝頤の序、竹坡間話、苦孝説等を加え、本文には張竹坡による批評文を加えた外は、本文自体さしたる相異はないとされるが、相異点は果たしてこれだけか、この点について今後精密に調査される必要がある⁵⁾。（傍線部は引用者。以下、同じ）

そもそも「詞話本」の成立が、『水滸伝』の第二十三回～第二十七回の武松物語を敷衍したものであるが、荒木氏は前掲書で「崇禎本」は「詞話本」を基にしてつくられた、いわば改筆本であるという立場を取られ、更に「詞話本」の中に残存する『水滸伝』の記述を「崇禎本」では極力排除しようとしたことが明らかにされている。但し荒木氏が論じているのは崇禎本『金瓶梅』第五十三回から五十七回までに関する記載であって、第一回に関して仔細に論じている先行研究は管見の限りでは未詳である。これは「詞話本」第一回と「崇禎本」のそれとは余りにも内容が異なるためかもしれない。本稿では荒木氏の説に従った上で、「崇禎本」第一回と「詞話本」との差異について論じるものである。

先ほども述べたが「崇禎本」第一回は「詞話本」の第一回目の話と全く異なっている。端的

に言う「詞話本」は『水滸伝』を踏襲し、武松と潘金蓮との出会いから始まっているのに対し、「崇禎本」は西門慶と十人の義兄弟の契りを結ぶ話となっている。このことについて日下翠氏は「改作者はおそらく、従来の話本にふさわしく、「西門慶の悪徳一代記」との性格をより強めようとしたのでであろう」と推測している⁶⁾。果たして日下氏の推論が、「崇禎本」の改作者の意図と一致するかどうかは今後更なる考証が必要であろうが、本稿では「詞話本」と「崇禎本」との第一回を詳細に比較検討した上で、幾つか考察を試みる。

なお「詞話本」は故宮博物院蔵影印本と『初刻本金瓶梅詞話』（芸苑出版社、一九九三年）を用い、「崇禎本」は『会評会校本金瓶梅』（秦修容整理、中華書局、一九九八年）を用いた。引用の際に訳・訓読も併せて附したが、詞話本『金瓶梅』には邦訳（小野忍・千田九一訳、岩波書店、一九七四年）があり、参考としているが、幾つか不明瞭だと思われる点は筆者が改めた。崇禎本『金瓶梅』は邦訳が無いので、邦訳『金瓶梅』を参考にしつつ、筆者自身が訳・訓読を施した。

二 「崇禎本」第一回について

「詞話本」第一回の冒頭は戦国時代の虞美人や漢代の戚夫人の例を用いながら、立派な男子も女のために我が身や家を危うくするという内容から始まり、武松の虎退治物語へと移行する。そして武松を誘惑する潘金蓮の登場という展開になり、西門慶の登場は第二回からとなる。ところが「崇禎本」第一回ではまず美人が男性を滅ぼす恐ろしさについて説き、次に財力の虚しさについて説き、天道の報いがあることを述べた後に、西門慶が登場するという順序となっている。

「崇禎本」第一回では西門慶とその朋友九人、併せて十名が義兄弟の誓いを結ぶところから始まるのが特徴だと言えよう。

一方「詞話本」では第十回と第十一回になってようやく西門慶の朋輩が登場する。「崇禎本」に見える西門慶の朋輩との比較のためにその箇所を次に挙げることにする。第十回に見える西門慶の朋輩についての描写は以下の通りである。

如今花太監死了，一分錢多在〔花〕子虛手裏。每日同朋友在院中行走，与西門慶都是会中朋友。西門慶是個大哥。第二個姓応，双名伯爵，原是開紬絹鋪的応員外兒子，沒了本錢，跌落下来，專在本司三院幫嫖貼食，会一脚好氣毬双陸棋子，件件皆通。第三個姓謝，名希大，字子純，亦是幫閑勤兒，会一手好琵琶，每日無營運，專在院中吃些風流茶飯。還有個祝日念・孫寡嘴・吳典恩・雲裏手・常時節・卜志道・白来搶，共十個朋友。卜志道故了，花子虛補了。每月会在一处，叫兩個唱的，花攢錦簇頑耍。衆人見花子虚乃是内臣家勤兒，手裏使錢撒漫，都乱撮合他，在院中請表子，整三五夜不歸家。

いま花太監が亡くなって、その持っている遺産は全て〔花〕子虚の手許にあるため、毎日友だちと廊へ通っており、西門慶とはその道の仲間です。西門慶が兄貴分で、二番目は応伯爵です。もとは絹織物屋の応員外の息子でしたが、元手をすって落ちぶれてしまい、専ら金持ちの嫖客の遊び相手になって飯にありつき、蹴鞠や双六・将棋が得意でみな通じております。三番目は謝希大、字は子純、これもまた取り巻きの放蕩息子で、琵琶が得意であり、毎日何もせず、専ら遊郭で男女の仲を取り持って飯にありついています。更に祝日念・孫寡嘴・呉典恩・雲裏手・常時節・ト志道・白来搶らがおり、併せて十人の朋友となります。しかしト志道が亡くなったので、花子虚が埋め合わせに入りました。毎月集まっては、二人の歌い女を呼び、派手に遊んでおりました。花子虚が宦官の家の極道息子で、金遣いも荒いことから、みんなでみだりに彼を（芸者と）引き合わせてしまい、廊で芸者を招くと、数日は家に帰ってきません⁷⁾。

ここでは花子虚の身の上の話を皮切りに、西門慶を筆頭とする十名の集団について述べられている。内容は彼らが頻繁に廊遊びをする道楽者として描かれているに過ぎない。次に挙げる「詞話本」第十一回にも西門慶の朋輩たちについて書かれているが、下記の通りである。

話休饒舌、那西門慶立了一伙、結識了十個人做朋友、每月会茶飲酒。頭一個名喚応伯爵、是個破落戸出身、一分兒家財都嫖沒了、專一跟着富家子弟幫嫖貼食、在院中頑耍、渾名叫做応花子。第二個姓謝、名希大、乃清河衛千戸官兒応襲子孫、自幼兒沒了父母、遊手好閒、善能踢的好氣毬、又且賭博、把前程丟了、如今做幫閒的。第三名喚呉典恩、乃本県陰陽生、因事革退、專一在県前与官吏保債、以此与西門慶来往。第四名孫天化、綽号孫寡嘴、年紀五十余歲、專在院中闖寡門、与小娘伝書寄柬、勾引子弟、討風流錢過日子。第五是雲參將兄弟、名喚雲離守。第六是花太監侄兒花子虚。第七姓祝、名喚祝日念。第八姓常、名常時節。第九個姓白、名喚白来創。連西門慶共十個。衆人見西門慶有些錢鈔、讓西門慶做了大哥、每月輪流会茶擺酒。

話はさておき、西門慶はグループを組み、懇意になった十人を友だちとし、毎月集まってはお茶を飲んだりお酒を酌み交わしたりしておりました。その筆頭の名前を応伯爵といい、没落した旧家の出身で、一切の家財はみな芸者遊びで無くなってしまい、専ら金持ちの子弟の遊び相手になって飯にありつき、廊で遊んでおり、あだ名は応花子（応のおこも）といいます。二番目は謝希大といい、清河衛の千戸の跡継ぎでしたが、幼い頃に父母を亡くし、ぶらぶらと遊び、蹴鞠が得意で賭博も好きで、官職の資格を失ってしまい、今は取り巻きとなっております。三番目は呉典恩といい、もとは県の陰陽師でしたが訳あって免職となり、専ら県庁前で役人相手に保証人代行を行っており、このため西門慶と関わるようになりました。四番目は孫天化、あだ名は孫寡嘴（孫のだんまり屋）年は五十余り

で、専らただで廓遊びをし、妓女のために手紙などを届けては、遊び客を引き入れ、色恋を取り持つお金をたかって日々を過ごしておりました。五番目は雲参將の兄弟で、名前は雲離守と言います。六番目は花太監の甥の花子虚。七番目は祝日念、八番目は常時節。九番目は白来創です。これに西門慶を加えると十人となり、西門慶がお金を持っているので、西門慶に兄貴分となってもらい、毎月持ち回りでお茶を飲んだりお酒を酌み交わしたりしておりました⁸⁾。

この箇所においても第十回の記述と同様、西門慶の朋輩が身を持ち崩した道楽者として描かれており、その中でも応伯爵・謝希大・吳典恩・孫天化については記載が比較的多い。そして雲離守・花子虚・祝日念・常時節・白来創ら五人については殆ど触れられていない。以上「詞話本」第十回と第十一回に見える、西門慶の朋輩の記述について述べた。

荒木氏の説に従い、「崇禎本」が「詞話本」の改作であるとするならば、次に挙げる「崇禎本」第一回到早々と登場する西門慶の朋輩に関する記載は、恐らく「詞話本」の第十回と第十一回の記載を用いたものと思われる。その箇所を次に挙げる。

〔西門慶〕結識的朋友，也都是些幫閒抹嘴，不守本文的人。第一最相契的，姓応名伯爵，表字光侯，原是開綢緞鋪応員外的第二個兒子，落了本錢，跌落下来，專在本司三院幫嫖貼食，因此人都起他一個渾名，叫做応花子。又会一腿好氣球，双陸棋子，件件皆通。第二個姓謝，名希大，字子純，乃清河衛千戸官兒応襲子孫，自幼兒父母双亡，遊手好閑，把前程丟了，亦是幫閒勤兒，会一手好琵琶。自這兩個与西門慶甚合得来。其余還有幾個，都是些破落戸，没名器的。一個叫做祝実念，表字貢誠。一個叫做孫天化，表字伯修，綽号孫寡嘴。一個叫做吳典恩，乃本県陰陽生，因事革退，專一在県前与官吏保債，以此与西門慶往来。還有一個雲参將兄弟，叫做雲理守，字非去。一個叫做常時節，表字堅初。一個叫卜志道。一個叫做白賚光，表字光湯。

(西門慶)の懇意になった友だちは、おべっかを使う取り巻きであり、分を弁えない人でもありました。一番目の最も気が合うのは、応伯爵で字は光侯と言います。もとは絹織物屋の次男坊でしたが、元手をすって落ちぶれてしまい、専ら金持ちの嫖客の遊び相手になって飯にありついております。このため人々は彼に応のおこもというあだ名をつけました。また蹴鞠や双六・将棋が得意で皆通じております。二番目は謝希大、字は子純といい、清河衛の清河衛の千戸の跡継ぎでしたが、幼い頃に父母共々亡くし、ぶらぶらと遊び、官職の資格を失い、取り巻きの放蕩息子で、琵琶が得意でもあります。この二人は西門慶ととても話が合うのでした。その残りの幾人かもみな没落した旧家の出身で、官職の資格はありません。一人は祝実念で字は貢誠と言います。次は孫天化で字は伯修、あだ名は孫のだんまり屋です。その次は吳典恩といい、元は県の陰陽師だったのですが、訳あって免職

となり、専ら県庁前で役人相手に保証人代行を行うようになり、このため西門慶と関わるようになりました。次は雲参將の兄弟雲理守で、字は非去といいます。次は常時節といい、字は堅初です。その次は卜志道、その次は白賚光、字は光湯と言います⁹⁾。

先にも述べたが、この「崇禎本」第一回の記載は、先に挙げた「詞話本」第十回や第十一回と内容が酷似していることから、崇禎本の改作者が「詞話本」の第十回・第十一回の記載を用いて「崇禎本」第一回の冒頭を作ったのではないかと筆者は考える。些か異なる箇所があるとすれば、朋輩の名前に若干違いがあるということと、後に西門慶に妻李瓶児を奪われる花子虚の名前がこの箇所では見えないことである。

そしてこの次に応伯爵と謝希大が西門慶のもとへ尋ねに来る場面が「崇禎本」第一回では以下のように続くのである。

西門慶道「昨日便在他家，前幾日却在那里去来？」伯爵道「便日前日，卜志道兄弟死了，咱在他家帮着乱了幾日，發送他出門，他娘子再三向我說，叫我拜上哥，承哥這里送了香楮奠礼去，因他没有寬轉地方兒，晚夕又没甚好酒席，不好請哥坐的，甚是過不意去。」西門慶道「便是我聞得他不好得没多日子，就這等死了。我前日承他送我一把握金川扇兒，我正要拿甚答謝答謝，不想他又做了故人」

西門慶は「昨日あいつ（李桂姐）の家に行っていたなら、ここ数日どこに行ってたんだい？」応伯爵が答えて「ここ数日といえば、卜志道の兄弟が亡くなったので、俺たちは葬儀の準備を手伝い、殯に送り出していたんですよ。あいつの嫁さんは俺が兄貴にお香典を備えてもらようよう伝言するようにと再三頼んだけど、あいつの家は広くてゆったりできる場所じゃないし、夜は何のいい宴席もないし、兄貴に来てもらうには相応しくなかったんで。本当に申し訳ないです。」西門慶は「あいつの体調がよくないと聞いてからさほど経っていないのに、こんな風に死んでしまうなんてなあ。俺は一昨日送ってもらった金川扇のことでお礼をしようと思っていたのに、まさか亡くなってしまうとは思ってもいなかったよ¹⁰⁾。」

上記の箇所には、西門慶に卜志道の死去や葬儀の様子について詳しく報告する応伯爵の様子が描かれている。しかし「詞話本」では前掲の通り「卜志道故了，花子虚補了」と簡素な記述しかなく、このことからすれば「崇禎本」の編纂者は西門慶の朋輩に関する記述についてかなり改作していることになる。

更に続いて、卜志道の死去のため謝希大が義兄弟の契りを結ぶことについて西門慶と相談をしはじめることになる。その記述は次の通りである。

謝希大道「結拜須得十個方好。如今ト志道兄弟没了，却教誰補？」西門慶沈吟了一回，說道「咱這間壁花二哥，原是花太監侄兒，手裏肯使一股濫錢，常在院中走動，他家後辺院子，与我家只隔着一層壁兒。与我甚說得來，咱不如叫小廝邀他邀去。」応伯爵拍着手道「敢就是在院中包着吳銀兒的花子虛麼？」西門慶道「正是他。」

謝希大が「義兄弟の契りを結ぶなら十人でなければならないよ。いまト志道兄弟が亡くなったから誰に入ってもらおう？」と言うと、西門慶は深く溜め息をつきながら「この隣の花家の二番目の息子が花太監の甥で、手許にたんまりお金があり、いつも廊遊びをしている。あいつの家の後ろの廊が俺の家と垣根をひとつ隔てただけの距離で、俺ととても話が合うんだ。小者呼んで彼を招待するのがいいんじゃないか。」と言います。応伯爵は手を叩いて「あの廊で吳銀兒を囲っている花子虚のことですかい？」と言いますと、西門慶は「そう、あいつのことだよ」と答えました¹¹⁾。

このように「崇禎本」では第一回から、西門慶の朋輩ト志道が亡くなってから花子虚に仲間に入ってもらうまでの経緯やそれに関する会話が事細かに描かれており、このような箇所は「詞話本」には全く見えない。更に西門慶らは花子虚を朋輩に迎え入れた上で、吳道官を招き、馬元帥という道教の神の前で義兄弟の契りを結ぶこととなる。その記述を次に挙げる。

吳道官写完疏紙，于是点起香燭，衆人依次排列，吳道官伸開疏紙，朗声誦道。

維大宋国山東東平府清河縣信士西門慶・応伯爵・謝希大・花子虚・孫天化・祝実念・雲理守・吳典恩・常時節・白賚光等，是日沐手焚香請旨。伏為桃園義重，衆心仰慕而敢効其風，管鮑情深，各姓追維而欲同其志。況四海皆可兄弟，豈異姓不如骨肉。是以当今政和年月日，虔備猪羊牲礼，鸞馭金資，瑞叩齋壇。虔誠請禱拜投，昊天金闕玉皇上帝，五方值日功曹，本县城隍社令，過往一切神祇，仗此真香，普同鑒察。伏念〔西門〕慶等，生雖異日，死冀同時，期盟言之永固，安樂与共，顛沛相扶，思締結以常新，必富貴常念貧窮，乃始終有所依倚，情共日往以月來，誼若天高而地厚。伏願自盟以後，相好無憂，更祈人人增有永之年，戸戸慶無疆之福，凡在時中，全叨覆庇。謹疏。

政和 年 月 日文疏

吳道官誦畢，衆人拝神已罷，依次又在神前交拝了八拜。然後送神，焚化錢紙，收下福礼去。吳道官は上疏文を書き終えたので蠟燭に火をつけ、人々は順序に従って列を作りました。吳道官は上疏文を開くとよく通る声で読み上げます。

維に大宋国山東東平府清河縣信士西門慶・応伯爵・謝希大・花子虚・孫天化・祝実念・雲理守・吳典恩・常時節・白賚光ら，是の日手を沐い香を焚き旨を請う。伏して為えらく，桃園義は重くして，衆心仰慕して敢えて其の風に効い，管鮑の情深くして，各姓追維して其の志同じうせんことを欲す。況んや四海皆兄弟なるべくんば，豈に異姓も骨肉

に如かざらんや。是を以て当今政和年月日、虔んで猪羊の牲礼、鸞馭の金資、瑞叩の齋壇を備えて、虔誠に請禱拝投す、昊天金闕玉皇上帝、五方值日功曹、本県の城隍社令、過往せる一切の神祇よ、此の真香に依り、普く共に鑒察せよ。伏して念ずらく、〔西門〕慶ら生は日を異にすと雖も、死は時を同じくせんことを冀い、盟言の永固たりて、安楽は与に共にし、顛沛は相扶けることを期し、締結の以て常に新たにして、必ず富貴なれば常に貧窮を念い、乃ち始終依倚する所有らんことを思い、情は日往きて以て月来るを共にし、誼は天高く地厚きがごとからんことを。伏して願うらくは盟より以後、相好みて憂い無く、更に祈るらくは人人は有永の年を増し、戸戸に無疆の福を慶び、凡そ時中に在りて、全くの覆庇を叨くせんことを。謹んで疏す。

政和 年 月 日文疏

呉道官は読み終えると、皆は神を拝み終え、順番に神前で八拜を交わしました。その後神様をお送りし、紙銭を焼き、お供え物を片付けました¹²⁾。

呉道官の上疏文に出てくる「桃園義重」とは『三国志演義』第一回に登場する、かの有名な「桃園の誓い」である。『三国志演義』本文では「不求同年同月同日生、只願同年同月同日死」となっており、前掲の上疏文では「生雖異日、死冀同時」となっているが、義兄弟同士が死を同じくすることを願うほどに人生を共にしたいという大意は変わらないであろう。「管鮑」とは、「管鮑の交わり」という成語に見えるように、春秋戦国時代に管仲と鮑叔牙が若く貧しい頃からの友情が、時に管仲の行いが鮑叔牙に不利益をもたらすようなことがあっても、生涯変わらなかったことを指す。

「崇禎本」第一回に見える西門慶ら十人も、劉備三義兄弟や管仲・鮑叔牙らのように友情を死ぬまで保ち、お互い助け合うことを神前で誓うのであるが、『金瓶梅』を一読すれば解るように、彼らの繋がりには西門慶が亡くなるや瓦解してしまう¹³⁾。

ここで筆者が着目したいのは花子虚の描かれ方である。前述のように「詞話本」第十回・第十一回では、卜志道が亡くなったあとに補填された花太監の甥であることが簡潔に記されているだけであり、また朋輩の順序は六番目で、応伯爵や謝希大ら西門慶に一番近い友人と較べると遠い順番にある。しかし「崇禎本」では、馬元帥の前で義兄弟の誓いをする際、花子虚は応伯爵や謝希大に続いて四番目に配せられており、比較的西門慶の朋輩の仲でも高い位置にあると言える。

ではなぜ「崇禎本」では花子虚がこのように比較的重要な友人の地位に据えられているのだろうか。なお「詞話本」・「崇禎本」ともに、第十三回で花子虚の妻、李瓶児は西門慶と密通してしまい、第十四回で花子虚は兄弟の財産争いに巻き込まれ、腹立ちの為に亡くなってしまう。「詞話本」と「崇禎本」との構成を比較してみると、「詞話本」では花子虚は西門慶の遊び仲間の一員に過ぎないが、「崇禎本」では招かれて義兄弟の誓いを結んだにもかかわらず、西

門慶に裏切られてしまうという流れになってしまう。よって「崇禎本」の方が「詞話本」より、西門慶の酷薄さや花子虚の運命の残酷さを一層浮き彫りにしていると考えることができる。

三、中国文学と男の絆

吉川幸次郎氏は『中国文学入門』（一九七六年、講談社学術文庫）に於いて、中国文学の特徴を次のように述べている。

また、西洋で最も多く詩の題材となりますものは、何より異性の間の恋愛でありますが、中国ではそうではありません。恋愛詩は中国にもないではありません。……西洋におけるほど圧倒的な題材ではない。これもさっきのローエルさんとエスカフさんの本の序文に書いてあることでありますが、たいへんおもしろいことをいっています。中国人は西洋の人ならば恋愛の詩にむかってかたむけるところの感情の燃焼、それを別のもののために保存してある。それは何かフレンドシップ、友情であるといっていますが、これもたいへんおもしろい言葉であります¹⁴⁾。

このように友情は中国文学に於いて重要な題材の一つであろう。上記の記載では詩に関するものであるが、白話小説などでも友情や男の絆を描くことは重要なテーマであると考えられる。井波律子氏は『中国の五大小説（下）』（岩波新書、二〇〇九年）で次のように述べる。

『水滸伝』にかぎらず、短編・長編をとわず、語り物を直接の母体とする中国白話小説の世界では、もともとプラトニックな「恋愛」が描かれることはほとんどありません。……しかし、『水滸伝』はこうしたプラスイメージの女性像すら登場しないのです。

『三国志演義』も『水滸伝』も基本的に「男の世界の物語」ですから、男どうしの関係性が最重視され、男女関係が埒外におかれるのは、物語作法からいえばむしろ当然だともいえるでしょう。それにしても水滸伝世界の女性観は過剰に潔癖であり、ほとんど女性嫌悪に近いといえるほどです。……総じて、『水滸伝』には「女性的なるもの」はすべからず「悪」であり、排除せねばならない、捨象して当然だという倫理観が厳然として存在するといっているでしょう。これはまさしく精神的にホモソーシャルな「男の世界の物語」なのです¹⁵⁾。

右の引用文に見える「ホモソーシャル」とはイヴ・セジウィックが『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』（名古屋大学出版会、二〇〇一年）で提唱した概念で、男性同士の強い紐帯を指す。ホモソーシャルを成立させるためには、同性愛嫌悪と女性嫌悪とが必要であるとされている。

さて、中国文学は吉川氏や井波氏が述べておられるように、友情や男性同士の紐帯が重要なテーマになっているのは鉄案であろうが、本稿では第二章で論じたように崇禎本『金瓶梅』第一回では義兄弟の誓いを結ぶ設定になっているものの、それは後に西門慶らの友情や繋がり of 脆さを表現するための仕掛けとなっている可能性を指摘した。

詞話本『金瓶梅』が『水滸伝』の世界観を引き継いでいる以上は、潘金蓮をはじめとする女性達に対して作者が嫌悪の目を向けていることは言うまでもないだろうが、『水滸伝』が男性同士の紐帯を描いているのに対して、『金瓶梅』は男同士の紐帯についても距離のある目線で描いていると言えないだろうか。

そして崇禎本『金瓶梅』が詞話本を改作した際に、第一回の箇所は大きく書き換えられた。それは『金瓶梅』が『水滸伝』から離れて独立した一作品であるようにするために改作者は意識したものであろうが、詞話本に既に描かれていた男性の絆の脆弱さを「義兄弟の契り」を描くことで更に一步推し進めたのではないかと筆者は考える。

『金瓶梅』の著者や崇禎本の改作者が、男性の繋がりについて醜さや矮小さを描いたのは、これは多くの中国文学作品が男性の紐帯を謳うのに対して稀有な特徴であると言えよう。『金瓶梅』の作者や「崇禎本」の改作者については目下のところ未詳であるが、恐らくは男性であり、作者は男性でありながら、男性の紐帯に対しても醒めた目線の持ち主であった。このことは中国文学の特徴から考えると『金瓶梅』は稀有な作品ではないかと考えられるのである。

おわりに

今回は「崇禎本」の第一回を「詞話本」の類似箇所と比較しつつ、「崇禎本」の改作者の意図について論じた。今後の課題は、まず「詞話本」と「崇禎本」を比較しながら男性の描き方について考察を深めることである。またその際に張竹坡の批評なども視野に入れながら進めていきたいと考えている。

次に、四大奇書の中でも『三国志演義』や『水滸伝』は宋代の語り物を基礎としているのであるが、両者に共通する点に異姓間の任侠的紐帯が挙げられる。山口久和氏は『「三国志」の迷宮——儒教への反抗 有徳の仮面』（文藝春秋、一九九九年）で次のように述べる。

……中国では異姓養子は宗族の純粋性を失わせるものとして忌避されてきた。ところが、六朝・唐の時代から宋以降の近世になると、こうした道德規範は徐々に拘束力をなくしてくる。その例として、男子のいない家が労働力を確保するために異姓の養子を迎え入れるということが盛んに行われる。小川環樹氏も、唐末から五代にかけて軍人大将がその部下を養子にすることがしばしばあったことを指摘して、義兄弟や義子といった人間関係が社会的に承認されるようになるのは近世に入ってからであると述べている。十人の「義社兄

弟」を基礎に宋朝を興した宋の趙匡胤はその歴史的典型である、『三国演義』の「桃園結義」はその文学的表現であったわけである。

ところで義兄弟というような人間関係は近世になって一応の社会的承認を得たとはいえ、決して知識人が互いに取り結ぶような性格のものであったためしはない。どちらかといえ、既成の秩序からドロップアウトした人間同士が支配社会への反抗を企てようとした際に結ばれる心情的紐帯であったことは、同じく通俗小説である『水滸伝』などに語られている通りである。そして興味深いことに、清末の政治的秘結社の三合会（孫文も参加していた）の入会誓詞は「吾人はともに生まれともに死せん。桃園（結義）に倣いて結びて兄弟とならん云々」というものであったといわれる（『三国演義試論』）。ここにも「桃園結義」がある種の歴史的真實を、すなわち正統的觀念から無縁である人々の精神と習俗を表現したものであったことが理解されるであろう¹⁶⁾。

中国文学に於ける重要なテーマとして、友情や男の絆があることは既に述べたが、山口氏の言及からすれば、更にそこには儒教とは価値観を異にする任侠的紐帯が存在することになる。となれば、中国文学に於いても儒教的価値観に沿った作品もあれば、そこから外れた任侠的紐帯をテーマとした作品もあることになろう。今後はこの点にも注意を払いつつ、中国文学に於けるホモソーシャルについて考察していきたい。

注

- 1) 「詞話本」に附せられている弄珠客の序文に「金瓶梅穢書也」とある。『金瓶梅』は「詞話本」の前に抄本で伝わっていたらしく、万歴年間に印刷物として刊行された際には「穢書」という評価が定まっていたようである。

なお、『金瓶梅』が初めは抄本で伝わっていたであろうという考察については、『金瓶梅』（岩波文庫、一九七三年）に見える小野忍氏の解説に詳しい。

- 2) 『金瓶梅』の素材について研究したものとしては、P. D. Hanan “Source of the Chin P'ing Mei”, Asia Major, New Series, Vol X Part I, London, 1963) や荒木猛『『金瓶梅』の素材と創作手法について』（『金瓶梅研究』、思文閣出版、二〇〇九年）などが挙げられる。

また『金瓶梅』と日用類書の関連について論じたものには、小川陽一『日用類書による明清小説の研究』（研文出版、一九九五年）がある。

- 3) 構想や内容について踏み込んだ研究は見られるが、「四大奇書」の中では些か少ないように思われる。その中でも主なものを次に挙げる。日下翠『金瓶梅 天下第一の奇書』（中公新書、一九九六年）。日下翠『中国戯曲小説の研究』（研文出版、一九九五年）。高橋文治「もう一つの『金瓶梅』論」（『中国四大奇書の世界』、和泉書院、二〇〇三年）。田中智行『『金瓶梅』の感情観』（日本中国学会報第五十七集、二〇〇五年、日本中国学会）。小松謙『『四大奇書』の研究』（汲古書院、二〇一〇年）。
- 4) 高橋文治氏は前掲論文2) に於いて次のように『金瓶梅』解説の困難さについて次のように述べられている。なお傍線部は筆者が補った。

しかるにその同時代人たちがこの本を楽々と理解したかといえ、これもどうもそうではないらしい。たとえば、この小説の版本には二系統ある。一つは「詞話本」であり、一つは「崇禎本」系である。今日すでに通説になっているように、「詞話本」が先に出版され、「崇禎本」は明らかにそれを改訂したものだが、ではなぜ「崇禎本」が「詞話本」を改訂したかといえ、それは「詞

話本」に難解で読みづらい部分が多くあったからだ。『詞話本』の出版から「崇禎本」までは、恐らく三、四〇年程度しかはなれていない。にもかかわらず、少なくとも「崇禎本」の編者には『詞話本』は解りにくかった。「崇禎本」には、誤字の訂正や単語の差し替えとは性格を異にする、明らかな「誤読」が含まれる。原『金瓶梅』とは、それほどまでに読みづらかったのである（『詞話本』も原『金瓶梅』ではない）。

（中略）この作品をなんかいにしている要素にはもちろん色々なものがあって、たとえば誤字やあて字が非常に多いこととか、テキストに多少乱れがあることとか、古い時代のスラング、方言、洒落、隠語がふんだんに使われているとか、その他いくつかの理由が考えられる。だが、『金瓶梅』が難しい最も本質的な原因は、テキストの表層にある、そうした解釈上の一つ一つの問題にあるでは恐らくない。本当の理由は、ことばに対する感性の鋭さそのものにあるのだ。作者はことばに敏感であるが故にスラングやシャレ、隠語を愛する。また、そのことばに対する感覚が鋭いが故に、人物を会話のみによって描き分けようとする。この小説の難解さは、表現のデリケートさに読者がなかなかついてゆけない点にあるだろう。

- 5) 『金瓶梅研究』第四部第一章、三五七頁～三五八頁。
- 6) 日下翠『金瓶梅 天下第一の奇書』（中公新書、一九九六年）
- 7) 初刻本金瓶梅詞話』第十回、一一七頁～一一八頁。
- 8) 初刻本金瓶梅詞話』第十一回、一二八頁。
- 9) 『会評会校本金瓶梅』第一回、一二頁。
- 10) 『会評会校本金瓶梅』第一回、一六頁。
- 11) 『会評会校本金瓶梅』第一回、一七頁。
- 12) 『会評会校本金瓶梅』第一回、二三頁～二四頁。
- 13) 『金瓶梅』第七十九回にて、西門慶は女色が祟って死亡してしまうが、八十回では朋輩の筆頭応伯爵が早々と西門慶の第五夫人潘金蓮を張二官に売り飛ばそうとしている。
この西門慶が亡くなってから、手のひらを返すように早々と不義理なことを働く応伯爵のことについて『金瓶梅』の地の文は次のように述べている。ここでは「詞話本」に依った。
看官聽說，但凡世上幫閑子弟，極是勢利小人。見他家豪富，希圖衣食，便竭力承奉，称功誦德。或肯撒漫使用，說是疏財仗義，慷慨丈夫。脅肩諂笑，献子出妻，無所不至。一見那門庭冷落，便唇譏腹誹。說他外務，不肯成家立業。祖宗不幸，有此破兒。就是平日深恩，視如陌路。当初西門慶待応伯爵如膠似漆，賽過同胞弟兄，那一日不吃他的，穿他的，受用他的。身死未幾，骨肉尚熱，便做出許多不義之事。正是画虎画皮難画骨，知人知面不知心。
- 14) 『中国文学入門』一三頁～一四頁。
- 15) 『中国の五大小説（下）』三一頁～三二頁。
- 16) 『『三国志』の迷宮——儒教への反抗 有徳の仮面』五二頁～五三頁。

A Study of *Jin Ping Mei Chongzhen* Text Chapter I

—As a Clue to the Homosocial in Chinese Literature—

Yukiko OHMURA

Abstract

In this article, I verified two texts of *Jin Ping Mei* 金瓶梅 around depicting of *Ximen Qing* 西門慶 and *HuaZixu* 花子虛 in *Chongzhen* 崇禎, text chapter I. As the result, Chapter I of *Cihua* 詞話 text amplifies *WuSong* 武松 *Tale of Suikoden* 水滸伝, but in it of *Chongzhen* text, *Ximen Qing* appears on the scene and, *Ximen Qing* and ten stable mates agree to a contract of adopted brother to themselves. So I found there is much different unfold between them.

In addition, I pointed that detailed depiction about *HuaZixu*, one of the stable mate of *Ximen Qing* enhanced tragic nature about *HuaZixu* who will be stolen *Li Pinger* 李瓶児, his wife by *Ximen Qing*, his stable mates later.

I think, many Chinese literature are depicted ligature and frendship among males basically but *Jin Ping Mei* is a literature depicted with keeping a distance from banded males by the author, and *Chongzhen* text has more tendency to keep it when it is adapted *Cihua* text.

Keywords: *Jin Ping Mei*, *Sutei* text, ligature among males, Homosocial, characteristic of Chinese literature